

留学生

- 1 -

かつて、留学といえば選ばれた優等生だけに許された特権だった。今は違う。日本の学校についてゆけない子供たちが、せめて英語だけでも身につけさせたいと願う親心につけこんだ業者たちによって、アメリカやカナダやオーストラリアの学校に送り込まれる。

輝男もその一人だった。

形ばかりの試験の結果、入学許可が降りたという通知が来たとき、輝男がまっさきに考えたのは、アメリカ↓金髪↓巨乳、その夜は、一晚中猿のようにオナニーに耽った。

九月、輝男は西海岸にあるその学校に入学するために渡米した。

「わあ、やっぱりアメリカ人はすげえなあ」
キャンパスに溢れるアメリカ娘たちをきよろきよろと眺めながら、輝男は股間の勃起を抑えられなかった。

「日本の女の子がいくら巨乳になったといつても、やっぱり白人にはかなわねえんだなあ。よおし、俺もがんばるぞ」

何をがんばるというのか。日本の女の子にもてない日本人が、アメリカ娘にもてるはずもないのだが、頭に血が上った状態の輝男、きよろきよろしすぎて、前から歩いてきた長身のブロンド

- 2 -

の少女にどしんとぶつかった。

「あ、ごめんなさい」

少女が抱えていたノートやテキストが地面に散らばり、輝男は慌ててしゃがんで拾い集め、ふと眼をあげると、目の前にすらりと伸びた長い脚、ミニスカート、きゅっと締まったウエスト、びったりと肌にはりついたTシャツを押し上げるはちきれんばかりの豊かな乳房。輝男、思わずしげしげと見とれたが、ふと、彼を見下ろす視線に気づき、慌てて立ち上がった。

すいませんでした、はい、とノートを差し出すと、小柄な輝男よりも二十センチは背が高いか、輝くブロンド、大きなブルーの瞳、肉感的な唇。スーパーモデルもかくやとばかりの美少女。

少女はしげし、輝男を興味深げに見つめていたが、すっと視線を下におろし、再びにやにやして輝男を見つめ、英語で何か囁いた。

「え、なんですか？ ええと……べ、ベッグ・ユア・パードン？」

突然、輝男の股間に凄まじい打撃。少女はにやにやしながら股間を膝で蹴りあげたのだ。長い脚に蹴り上げられ、輝男の貧弱な体は宙にはねあげられ、どきりと地面に落ちたときには、凄まじい激痛が股間から下腹部全体を覆い、まるで腸がねじれるよう。息をすることもできずうずくまった。

背後で、少女たちのグループが拍手喝采、歓声をあげた。

輝男を蹴りあげた娘は高笑いを残して歩み去った。

それから三十分、輝男は立つこともできずにうずくまっていた。

「いつてえ！」

思わず悲鳴をあげた。見下ろすと、便器が赤く染まっている。いわゆる血の小便。あれから三日たっても止まらない。

脚をひきずるようにトイレから出てぐったりとベッドに寝ころんだ。よほど強く蹴られたと見えて、まだ痛みが収まらない。腫れは引いたが、とくに強く蹴られたらしい右側の睾丸が大きく膨らんでいて、歩く度にしくしくと痛む。

「潰されなくてよかったなあ」

留学生用の宿舎で同室となった修が言った。

「なんでも、あの女、ジュリーっていうんだが、男のタマを蹴ることにかけちゃあ、そうとう経験つんでるらしいぜ。ショックで不能になった奴も少なくないらしい。なんせあの体だ、セクハラを受けたって言われれば、警察だって大学だって信用するしかない。それに校長の娘ときた。それをいいことにやりたい放題やってる。潰されなかっただけでも幸運らしいよ」

「でも……もう三日も勃たないんだぜ」

「まあ、彼女に蹴られたら二週間は不能になるのは常識だそうだ。諦めろよ」

二週間たって、いや、このまま不能になってしまったらどうしよう。輝男は憂鬱だった。動

く度に痛むので、何をする気にもならない。しかし学校のカリキュラムは厳しく、休むわけにもゆかぬ。キャンパスに出たら出たで、女の子たちが、陰囊に腿が触れないよう尻を突きだしてがに股で歩く自分を指さして、ひそひそ話をしているのが分かる。あいつが、最近ジュリーに蹴られた日本人よ。

「まあ、こつちじゃ、女の子の金蹴りは常識らしいからな。仕方ねえよ」

「アジア人って嫌い……」

ジュリーはルームメートのリンダに言った。

「鬱陶しい。黄色い顔の連中がうろろしてるのを見るだけで嫌」

「そんなこと言つてると、人種差別主義者のレッテル貼られるよ」

リンダは笑った。身長一八〇センチのジュリーとは幼なじみ。リンダは一六四センチとやや小柄な部類で、ジュリーと違って暴力には関心がない。つねに冷静さを保ち、それ故にジュリーとウマがあう。ラテンの血がまじって髪の色はブラウン。潤んだ瞳のセクシーな少女である。胸の大きさにかけては、ジュリーにもひけをとらない。

「アジア人は優秀だっというけど、どうやらこの学校にやってくる日本人は例外のようね。日本で行き場のない連中を引き取ってお世話するのが受け入れの目的みたいよ」

リンダは解説した。

「というより、そいつらの馬鹿な親たちからふんどくって儲けようってことみたいね」

「冗談じゃない。それじゃ我が校のレベルが下がる一方じゃないの」

ジュリーは憤慨した。ポーンマス校の創始者は彼女の先祖である。今は彼女の母親が校長を勤めているが、権限は理事会が握っている。日本人留学生の受け入れを主張したのは理事の連中で、それもこれも学校経営が苦しくなっているからなのだが。

ジュリーは一人娘である。いずれポーンマス校の校長の地位を継ぐ。それまでに、あの金儲けしか考えない理事たちから学校を守らなければならない。彼女は真剣にそう考えていたのだ。

「とにかく、なんとかしなくちゃ。リンダも何か考えてよ。あなたはいずれ、私の片腕としてポーンマス校を指導する役割を果たすのだから」

「そうねえ……じゃあ、あの留学生たち全員、タマを蹴ってやったら？ タマを蹴られた男の子って、精神に障害をきたして無気力になるっていうじゃない」

リンダは言った。十人の日本人留学生は、一年目は特別クラスで英会話を習わされる。そこである一定の成績を収めなければ、就学ビザを取り消され帰国を余儀なくされるのだ。もともと頭の悪い連中だ。無気力状態に追い込めば、全員落第するに決まってる。

リンダはむろん、冗談のつもりだった。

「趣味と実益をかねて、どう？」

だが、ジュリーは真面目な表情を崩さなかった。

「いいアイデアかもね」

日本人留学生の一人である敬一は、元空手部。ふだんはおとなしく無口だが、きれて暴れて、何人も怪我させたことがあるという札付きだった。背は高くないが、肩幅が広く、目が細く、ハリウッド映画によく出てくる典型的なアジア人悪役のような容貌の持ち主だった。

留学生は一応、寄宿舎を用意されるが、彼だけは郊外の一軒家を借りていた。彼の親は資産家で、空手の練習場が家のなかになれば嫌だ、という息子のわがままを聞き入れたのである。

その日の夕方、授業を終えた敬一は、まっすぐに家に帰り、トレーニングルームで汗をかいていた。

ふと、ドアのインターフォンが鳴った。モニターを見ると、金髪の背の高い少女と、ブルネットのラテン系の少女が立っていた。

不審に思いながらドアを開けた。

「May we come in？」

リンダがにっこりと笑った。敬一は、その程度の会話も交わせない程度の英語力だったが、とにかく頷いた。少女たちは遠慮せずに入ってきた。ジュリーは黒のタンクトップにジーンズのホットパンツ。リンダは白いTシャツにレザーのミニスカートだった。二人とも、この暑いのに手袋をしている。

「広い家ねえ。さすが日本人、あんたみたいな馬鹿息子のために一軒家を用意するなんて、信じられない話ね」

ジュリーが言った。敬一は意味が分からず、ぼんやりと突っ立っている。

「意味が分からないみたいよ」

リンダがくくくつと喉を鳴らして笑った。

「それでアメリカ留学なんて、馬鹿みたい」

二人の少女は玄関から散らかったダイニングを抜け、地下のトレーニングルームへと案内もされないのに入ってしまった。敬一は、ただ彼女らの後を追っただけだった。

トレーニングルームの隅にソファ・ベッドが置かれていた。その傍らに写真集が積んであった。トレーニングをしたあと、そのソファ・ベッドで写真集を見ながらオナニーするのが敬一の趣味だったのだ。

「ふうん」

ジュリーが写真集を取り上げ、広げた。

「これが日本のピンナップ・ガールか」

「返せ」

突然、敬一が手を伸ばして写真集をひったくった。そのはずみに写真集のページがびりびりと破れた。

「なにしゃがる！」

敬一がいきなり、ジュリーの頬を引っぱたいた。ジュリーはかっとなった。お返しに、平手打ちを浴びせ、頬を押さえてひるんだ敬一に回し蹴りを放った。

顔面をまともに蹴られ、敬一は一瞬意識を失った。気がつくくと、敬一は壁に叩きつけられ、尻餅をついていた。

目をあげるとジュリーが長い脚を広げて立ち、敬一を見下ろしていた。

「You dirty yellow ape, I will bust your fucking nuts」

どういう意味だ……。敬一はぼんやりした頭で考えた。ジュリーがべっと唾をはいた。唾が敬一の頬を濡らした。

敬一は猛然と立ち上がった。切れた。喧嘩を売っているのは明らかだった。敬一は奇声を張り上げ、小憎らしい白人娘に蹴りを繰り返した。

ジュリーは簡単に蹴りをかわし、突き出された右足を抱え込み、くいとねじった。敬一の体が空中で一回転し、うつ伏せに床に叩きつけられた。慌てて立ち上がったとき、ジュリーの足の甲が敬一の鼻柱に叩きつけられた。またも意識が弾け飛び、口の中に血の臭いが充満した。

ジュリーはすかさず、敬一の襟首をつかみ、みぞおちに三度四度、膝をたたき込んだ。激しい苦痛と、嘔吐がこみあげた。さらにジュリーは両手の掌を広げ、敬一の両耳を叩いた。敬一は両手で頭を抱えた。続いてジュリーの爪先が、敬一の股間に叩きこまれた。

「うっ！」

これまでとは比べ物にならない激痛が股間から頭頂を貫いた。内臓を引きちぎられるような苦痛が下半身に広がった。敬一は股間を両手で押さえ、膝をついた。だが、立て続けに容赦ない打撃が敬一を襲った。ジュリーは、敬一の顔面に回し蹴りを放った。

足の甲が敬一の唇を襲った。前歯が折れ、口から鼻孔から血が噴き出した。敬一は仰向けに倒れた。その股間をジュリーは踵で踏みつけた。

敬一は絶叫した。血反吐をはき、片手で顔を、片手で股間を押さえて、もはや戦意どころではなかった。凄まじい苦痛に、無力な芋虫のように悶え転がるしかなかった。

ジュリーは肋骨を一蹴りして敬一を仰向けにした。左右の足首をつかんで持ち上げ、大きく広げた。

敬一は、腫れ上がった顔を恐怖に引きつらせ、呻くように唇を動かした。涙が滝のように流れ落ちている。何を言っているかはジュリーには分からなかったが、必死に嘆願していることは理解できた。ジュリーは性的な興奮を覚えた。打ちのめされ、屈辱に震えながら、慈悲を乞う男を、容赦なく絶望のどん底にたたき落とす。何度も味わった快感だったが、こればかりは飽きることはない。ジュリーは宣告した。

「You, dirty Jap, Now I will castrate you」

にやりと残忍な微笑みを浮かべ、左側の睾丸めがけて踵をたたき込んだ。ジュリーの踵と股間

節の間で、鞆丸が一つ潰れた。

敬一は絶叫した。血反吐を吐き出し、体を大きく反らせた。ジュリーはつづいて右側の鞆丸を蹴り潰した。

ジュリーは敬一の体を投げ出した。みるみる股間が赤く染まり、床に血溜まりを作っていた。

「さてと……」

ジュリーはぱんぱんと両手を叩き、リンダを見た。

「さっさと帰るよ」

ジュリーは高揚していた。はやくアパートに帰り、リンダと熱い抱擁を楽しみたかった。だが、リンダは無言だった。頬が紅潮していた。彼女は、ジュリーが男の股間を蹴る場面は何度も見ていた。だが、残酷に鞆丸を潰してしまう場面を見るのは初めてだった。友人が発揮した残忍さに怯える一方で、抑えがたい興奮が全身を包んでいるのを感じた。

リンダはいきなりジュリーに抱きついた。

「どうしたの？」

ジュリーは面食らって言った。

「抱いて」

リンダは荒い息の下で囁くように言った。

「私、おかしくなったみたい……なんとかして」

翌日。瀕死の敬一が発見され、町は大騒ぎとなった。警察は、強盗か、あるいは最近存在が噂されているネオナチの仕業ではないか、と推定した。敬一は一命をとりとめたが、完全に発狂していた。

「なんでも、タマを二つとも潰されてたらしいぜ」

修が輝男に囁いた。彼は留学生仲間のなかではいちばん英語力があり、新聞くらいは読める。

「そりや、痛かったろうなあ」

輝男は自らの体験を思い出し、青ざめた。

「一軒家なんか借りるからだよ。アメリカは治安が悪いし、日本人なんて金持ちだと見られてるんだから」

「一軒家を借りてるといって……そりや、ええと健二だったっけ。あいつもそうじゃなかったか？」

健二は眼鏡をかけた、どこからどうみてもオタクだった。誰とも口を聞かず、休憩時間には何やら極彩色の漫画本を読みふけている。中身は分からないが、大人向けのロリコンマンガの類であることは見当がついた。

「空手自慢の敬一がやられるくらいだから。あいつも寄宿舎に入ったほうがいいんじゃないかねえのかなあ」

「寄宿舎じゃあ、すけべビデオとか見られないからじゃねえの？」

「なにこれ？」

忘れ物を回収するため所属しているバスケット部の更衣室に入ったジュリーは、ロッカーの上に乱雑に置かれた用具の間に埋もれている金属製の箱のようなものに気づいた。

小型カメラだった。8ミリビデオのカセットが内蔵されていた。

隠しカメラだ……。カメラには *made in Japan* と書かれてあった。日本製か。となると、誰か隠しカメラを設置した日本人留学生がいるのだ。

ジュリーはにやりと笑った。大義名分ができた。

夜。

小柄な眼鏡をかけた日本人留学生——健二がきよろきよろと周囲を見回しながら、女子更衣室に忍び込んだ。懐中電灯を照らし、ロッカーの上に隠したカメラを回収し、急いで更衣室を出た。彼は、更衣室に二人の少女が潜んでいるのに気づかなかった。

健二は家に戻ると、急いでカセットをデッキに挿入し、再生ボタンを押した。だが、テレビ画面に映し出されたのは、一枚の紙であった。大きくマジックでこう書かれていた。

「WE NEVER FORGIVE YOU. YOU WILL LOST YOUR BALLS TONIGHT」

それきり画面は切れた。

健二はうろたえた。もう一度再生し、画面を静止させ、英和辞書をめくった。

「え、ええと……私たちは……許さない……あなたを……あなたは……失う……あなたの……ボールを……今夜……」

どういうことだ？ 盗撮がばれたのはたしかだ。許さない……。何か報復があるのだろうか。

ふと、健二は背後を振り向き、わっと叫んで尻餅をついた。

いつの間に入ってきたのか、二人の少女が立っていた。

「間拔けな日本人。更衣室なんか撮影して、何をするつもりだったの？」

ジュリーが嘲笑した。健二は泣きそうな顔で、「ノー、ノー」と言った。

「何が、ノーなの？」

健二は後ずさりしながら、なおも「ノー、ノー」と繰り返した。

「他に英語を知らないんじゃない？」

リンダが笑った。ジュリーはしゃがみこみ、健二の眼鏡を外し、頬を殴りつけた。健二は仰向けに倒れ、それから頬を押さえた。目に涙があふれていた。

「だらしのないのね。もう泣いてる」

「こういう弱虫は……」

ジュリーがリンダを振り返った。

「じつくりいたぶろうぜ」

だが次の瞬間、ジュリーが悲鳴をあげた。健二がいきなりジュリーの乳房をつかみ、ぎゅっとひねりあげたのだ。思わぬ反撃だった。ジュリーは腕で乳房を抱えてうずくまった。

健二は立ち上がり、何かわめきながら走りだした。リンダが後を追った。健二は玄関まで走り、ドアにとりついた。ノブをがちやがちや回した。外に出ようとして、焦っていた。リンダは健二に追いつくと、背後から股間をめがけて脚をはね上げた。

足の甲が健二の股間に命中した。リンダは、足の甲に二つの肉塊の存在を感じた。初めての股間蹴りだった。

健二の体が一瞬硬直し、それからへなへなと紙のようにくずおれた。

「す、すごい……」

リンダは呟いた。こんなに効果的だとは……。

ジュリーだけじゃない。私だってやれる！

「よくやったね」

振り向くと、ジュリーが立っていた。まだ乳房を両腕で抱えている。よほど痛かったのだろう。

顔を歪め、いまいましように健二を眺めている。

「油断しちゃったよ。逃がすところだった……」

ジュリーはドアにもたれ、必死で股間に痛みを堪える健二の髪の毛をぎゅっとなつかみ、強引に引っ張って立たせ、こちらに向かせて命令した。

「手をどけな」

健二は涙を流しながら、ジュリーを見つめていたが、蛇に睨まれた蛙のように、おずおずと手を股間から離れた。

次の瞬間、健二の体が宙に浮いた。ジュリーが健二の股間を膝で蹴りあげたのだ。ジュリーは続けざまに三度、健二を蹴りあげ、その度に健二の貧弱な体は宙に浮いた。

もはや息もたえだえとなつて、健二はどさりとうつ伏せに倒れた。体が細かく痙攣していた。

唇から涎がたれていた。

なおも健二につかみかかろうとするジュリーをリンダが制した。

「まって。仕上げは私にやらせて！」

ジュリーはリンダを見た。眼がきらきらと輝いていた。

「わかった」

リンダは獲物に飛び掛かる狼のように健二に走り寄り、髪の毛をつかんで健二を仰向けにし、ズボンを脱がせた。赤く膨れ上がった陰囊の上に、小さな皮をかぶったペニスがちよこんと乗っかっていた。リンダは、拳を振り上げ、陰囊に叩きつけた。

ぱんと音が響いた。内出血で膨張していた陰囊が裂けた。リンダは返り血を浴び、美しい顔が

赤く染まった。リンダは、陰囊の裂け目から流れ出た睾丸を手にとり、しげしげと眺めた。

「これが、それなのね」

ジュリーは頷いた。リンダは二つの睾丸を指で押し潰した。

恵一に続き、健二までも睾丸を潰されて瀕死の体で発見されたことで、日本人留学生たちはパニックに陥った。三人の留学生が帰国した。

事件は新聞紙上を騒がせ、日本のメディアも押し寄せて、静かな町はちょっとした騒動に巻き込まれた。だが、健二も精神に異常をきたしていたため、犯人は分からずじまいだった。

残る五人の日本人留学生は、次の標的となることに脅え、勉強どころではなかった。

「お前は帰国しないのか？」

修に訊ねられ、輝男は首を振った。帰国したっていいことなどないのだ。ここで頑張らないと一生つぶしがきかなくなるであろうことは、呑気な輝男にも分かりきっている。

「まあ、俺らは寄宿舎だから大丈夫だと思うし」

「しかし、アメリカがこんな危ねえところとは思わなかったなあ」

修は呟いた。ふと、廊下で足音が響き、どさっと重いものが倒れる音がした。

「なんだ？」

ドアを開けると、日本人留学生の一人、良雄が股間を手で押さえてうずくまっていた。傍らに、

良雄と同室の稔が立っている。

「どうしたんだよ」

「良雄の奴、女の子にタマ蹴られたんだ」

「え？」

稔は説明した。

「こいつ馬鹿だからさ。間違って女子トイレに入っちゃったらしいんだよ。運悪く女の子が一人入ってきて。いきなり悲鳴をあげてこいつに飛び掛かって、膝でガツン。おまけにトイレからひきずり出されて、他の女の子たちからさんざん蹴られたらしいんだ」

「い、いてえ……」

良雄が青い顔でうめいた。稔は続けた。

「そこに俺が通りかかって止めようとして、俺もタマを蹴られた。俺はすぐに逃げたから一度ですんだし、そのときはすげえ痛かったけど、二十分ほどで回復した。こいつ、何度か蹴られたらしくて、一時間たつけどまだ痛みが引かないんだとよ」

良雄を部屋に運び、氷で冷やしたりした。やっと良雄が寝ついたので、輝男、修、稔、そしてもう一人の孝志の四人が輝男の部屋に集まって相談した。

「とにかく、ここの女の子はおつかないよ。ちょっと気に入らないと、すぐ金玉を蹴るもんなあ」
なにしろ、残る五人のうち三人、女の子にタマを蹴られた経験者なのだ。恵一や健二みたいに

廃人にされたりはしないまでも、この調子では卒業するまでに潰されかねない。不能にされるためにアメリカまで来たわけではないのだ。

「とにかく、自衛しないとな」

「先生に訴えようか」

「無駄無駄。この学校では年間、十数人の男子生徒がタマを蹴られてるんだが、校長が女ということもあって、蹴られた被害者の言い分がおった試しはないんだってよ。それどころか、セクハラしたことになるって退学処分になった例だってあるそうだし」

「やな国だねえ、アメリカって」

四人が黙り込んだ。と、孝志が「あ、そうだ」と叫んだ。

「なんだよ」

「ちよっとパソコン借りるぞ」

孝志は、輝男のパソコンを立ち上げ、なにやら操作していたが「見てくれ、これ」と画面を指さした。

インターネットの、マーシャルアーツ用品のページだった。groin protector と商品名が書かれていて、写真が掲載されていた。

「なんだこれ？」

「ええとね。要するに格闘技なんかで急所を守るために付けるプロテクターさ」

価格は十五ドル。二千円しないと思うと、高い値段ではない。

「買ってみるか」

一週間後、商品が送られてきた。禪のようなものだが、股間の前の部分が厚く広がっていた。

「ごわごわしていて、穿き心地は悪い。」

「しかし、こんなもんで、本当に効果あるのかなあ」

修は呟いた。

「試してみようか」

輝男が顔を輝かせていった。彼は今朝、三週間ぶりに朝立ちした。夢中でオナニーした。三週間溜まりに溜まった精液を吐き出し、有頂天になっていた。

これさえありやあ怖くない。よおし、アメリカ娘ども待っておれ、がんがんナンパしてやるぞ。脳天気な輝男は、そんなことを考えていたのである。

「そうだ。あの俺のタマを蹴ったあのかい女の子。彼女をナンパしよう」

「ジュリーか？ やめとけ。また、蹴られるのがオチだぜ」

「大丈夫さ。こっちには強い味方がある」

輝男は、ズボンを脱ぎ、ブリーフの上から鞞丸プロテクターを装着した。

「蹴られたって平気だい」

「でも、どこまで効くかわかんねえぞ」

「だから試してみようってしてるんじゃないか」

修は暉男の楽天性に呆れた。まあほつとこう。確実に蹴られるだろうけれど、わざわざ実験材料になってくれるのだから。

昼休み。輝男はキャンパスをうろろして、ジュリーを探した。

はたして、ジュリーは中庭にいた。ジュリーとリンダが芝の上にランチボックスを広げ、サンドイッチを食べていた。少し離れて三人の女の子たちがお喋りをしていた。

「へへへ」

輝男はずかずかとジュリーに近寄り、頭をかいて笑った。

「何よ」

ジュリーはつつけんどんに言った。だが輝男はにやにや笑いをやめない。ジュリーは露骨に不快な顔をした。だが、相手の日本人は、よほど鈍感なのか、薄気味悪い笑いをおさめようとはしない。

「用がないのなら、あっちへ行つてよ」

ジュリーは言ったが、輝男には当然、何を言っているかわからない。

「ええと、シャル・ユー・ゴー・ステディ・ウイズ・ミー？」

和英辞書をめくって探しあてた口説き文句だった。俺と付き合わないかい？

と言ったつもりだったが、発音がひどすぎて、ジュリーにもリンダにも分からなかった。

「なんだって？」

「シャル・ユー・ゴー・ステディ・ウイズ・ミー？」

日本人はえへらえへらと笑いながら繰り返した。ジュリーは切れた。

「行けって言ってるだろ」

いきなり座ったまま、長い脚を突き出した。踵が輝男の股間に直撃し、輝男は尻餅をついて引っこ繰り返した。

と、輝男はむくりと起き上がり、芝を払って立ち上がり、

「シャル・ユー・ゴー・ステディ・ウイズ・ミー？」

と繰り返した。ジュリーは啞然とした。効いてない。

輝男は得意だった。さすが、鞆丸プロテクター。ちよつと痛かったけど、前に蹴られたときほど効いてない。えへへ、俺のこと見直すかな。

そのとき、成り行きを見つめていたリンダがジュリーに耳打ちした。ジュリーは頷いた。周囲を見回してから立ち上がり、輝男の肩をぼんと叩いて微笑んだ。

「急所は、鞆丸だけじゃないだよ」

え？ 意味が分からず輝男が口をぽかんとあけたとき、ジュリーは拳をかため、輝男のみぞお

ちに打ち込んだ。

「げっ！」

輝男はみぞおちを両手で押さえ、膝をついた。ジュリーはその顎を蹴りあげた。輝男は仰向けに倒れた。その胸にジュリーは跨がり、「動くな！」と命令し、平手打ちを浴びせた。

リンダが俊敏に走り寄り、輝男のズボンを脱がせた。

「あー、こいつ、こんなものつけてる！」

すばやく睾丸プロテクターをはぎ取り、他の女の子たちに向けて振った。女の子たちは手を叩いて笑い、歓声をあげた。

「馬鹿な奴。こんなもの付けていれば安心だと思ってたみたい。世の中、そんなに甘くはないよ」ジュリーは、涙目になった輝男をまたも平手打ちにし、それから他の女の子たちに声をかけた。

「おおい、こつち来なよ。こいつの金玉蹴らせてあげるから」

三人の女の子たちがやってきた。

「いいの？」

「大丈夫。やってみな」

「わあ、私、男のタマを蹴るの初めてなの」

そばかすだらけのエイミーという小柄な少女が興奮して叫んだ。

「じゃあ、今日は初体験ね。痛いのは男のほうだから安心しな」

エイミーはきょつきゃつと笑い、輝男の脚と脚の間に立ち、爪先で股間を蹴りつけた。

「うっ」

輝男は呻いた。あの凄まじい苦痛。

エイミーは他の女の子たちとハイタッチをした。二人目の女の子が輝男の股間を蹴った。激痛が倍増して輝男を襲った。息をすることもできなかった。下半身が痺れた。抵抗しようにも、両腕はジュリーに押さえつけられている。

三人目の女の子が、輝男の股間に立った。輝男は必死で声を絞り出した。

「ドント、ドント……ドント・キック・ミー」

「何言ってるの？」

「発音が悪くてよくわかんないけど、蹴ってくれって言ってるんじゃないの？」

女の子たちは笑い、「それ、ジャネット、やっちゃえ」と三人目の女の子を促した。

ジャネットという女の子は、女子ラグビー部員。背も高いが、横幅もあった。逞しい脚をウォーミングアップするように何度か振った。

あんな脚で蹴られたら、死ぬかもしれない。輝男はパニックに陥った。神様、助けて。やっと勃起するようになったばかりだというのに。

三度目の激痛が股間に炸裂した。全身が引き裂かれるようだった。苦いものが胃袋から口にもみ上げてきた。輝男は失神した。

「だからやめろって言ったんだよ」

修は、ベッドに転がって呻く輝男を見ながら言った。

「まあ、睾丸プロテクターを外されなければ、蹴られても痛くないことはよく分かったけどよ。そんなもんじゃ、こっちの女の子には誤魔化しがきかないってことなんだろうーな」

「お……おれ……」

「なんだ？」

「このまま、もう勃起しないかも」

「かもな」

修は突き放したように言った。輝男はわんわん泣き出した。

「あいつら、ちっとも懲りてないみたいね」

ジュリーは苦々しげにリンダに言った。

「今日はキャンパスだったから、潰す前に止めたけど、完全に潰しておいたほうがいいかもしれない」

「でも、どうするの？」

リンダは言った。

「残る五人はみんな寄宿舎よ。みな授業が終わると寄宿舎に籠もって出てこないっていうし。まさか、寄宿舎を襲撃するってわけにはいかないでしょ」

リンダはすっかり、「玉潰し」の魅力にとりつかれていた。だが、健二の睾丸を潰して以来、何人もの男の股間を蹴ってやったが、潰すには至っていない。

もう一度潰したい。健二の睾丸を掌で握りつぶしたあの感触が甦る度に、リンダの性器は濡れてくるのであった。

「おびき出すしかないけど……なにか方法はあるかしら」

「おびき出すといってもね。あの日本人たち、私を見るだけでどっかに逃げてしまうし。近頃じや、私だけじゃなくて、女の子には一切近寄らないって言うし」

「白人の女は怖いって思い込んだのね。アジア人だったら平気かしら」

ふと、ジュリーの頭にいいアイデアが閃いた。ジュリーは微笑んで言った。

「いい手がある」

ジュリーの従兄のジョンはプレイボーイで知られ、何人もセックスフレンドを持っている。そのうちの一人が、フリーランスのジャーナリストで二年間アメリカで暮らしているレイコという日本人女性だった。

二十四歳のレイコには武道の嗜みがあった。ある夜、ジョンとデートしていて、暗がりです

組の強盗に襲われた。すると、レイコは左右の足で二人の強盗の股間を蹴りあげて撃退した、という。

ジュリーはジョンからレイコの連絡先を聞き、日曜日に郊外のレストランで昼食をとった。レイコは、魅力的な女性だった。身長一七四センチ。豊かな胸に引き締まったボディ。日本人にもこんなにプロポーションのいい女性がいるのか、とアジア人嫌いのジュリーも感心した。ポーンマス校の日本人どもときたら、みな、ひよろひよると痩せていて、脚が短く、魅力的な肉体の持ち主は誰一人いない。さらにレイコの知的で、歯切れのよいもの言いも気に入った。

「護身術は子供のときから習ってたの」

レイコは流暢な英語で言った。

「もともと私、喧嘩が強くて、小さいときから男の子を泣かすのが得意だった。そのせいか、日本人男性には魅力を感じられなくて、それでアメリカに来たようなものね」

脈あり、と見たジュリーは、実は相談があるんだけど、と切り出した。学校に留学してきた五人の日本人少年がいる。セクハラがひどくて、女の子たちは迷惑している。こいつらを懲らしめてやりたいのだ、とジュリーは言った。

「面白そうね」

レイコはにこりと笑った。

「でも、セクハラがひどいってのは嘘じゃないの？ 日本の男の子って気が弱くて、とてもそん

な度胸があるとは思えない。でも、ま、いいよ。男の子をいじめるのは大好きだし」

翌日。

寄宿舎の四人の日本人留学生は、突然の来訪者に驚きを隠せなかった。

背の高い日本人美女が、隣町から自分たちを訊ねてきたというのである。

股間の痛みが引かずベッドで寝たきりの輝男をのぞく四人の日本人——修、稔、良雄、孝志は口をぼかんとあけて、立て板に水で喋る美女を見つめていた。

「というわけで、日本人だけのパーティを開くことになったんです。あなたがたも是非、出席していただきたいんですよ」

「でも……」

修がしどろもどろに言った。

「その日は都合が悪いですか？」

「いや、そんなことはないんですけど……会場は遠いし、僕ら車持ってないし」

「タクシーか何かで……」

「いやその……僕ら英語自信ないから、うまくつけるかどうか」

馬鹿だこいつら。レイコは軽蔑を顔に出さず、にこやかに言った。

「じゃあ、私が迎えに来ましょうか」

「え、それ……悪いですよ」

俯いてもじもじする日本人青年たちに、レイコは久しぶりにサディスティックな性分が沸き起こり、体全体が疼くのを感じた。

結局、レイコは強引に四人に招待を受けさせることに成功した。

「へっ、残念だったねえ」

部屋に戻ってきた修は、寝ころんだままの輝男に、パーティに出席することを告げた。だが、輝男は悔しそうな素振りも見せず、枕に顔を突っ込んだまま答えた。

「いいよ。俺、そんなとこ出たくない」

「女の子も大勢来るらしいぜ」

「女の子は、もういいよ」

ジュリーだけではない。五人の女たちにかわるがわる睾丸を蹴られた体験は、輝男を無気力に陥れ、女性への興味を失わせた。

修は優越感に浸りながら言った。

「そうか。じゃあ遠慮なく行かせてもらおうぜ」

一週間後。

ホンダの四駆に乗って現れたレイコの姿に四人の日本人は息を飲んだ。

豊かな乳房の谷間を強調した黒いパーティドレス。ミニスカートから、日本人離れた長い脚が伸びていた。

その美しさに圧倒された四人は、車に乗り込んでからも無言だった。

レイコだけがお喋りをした。一人一人に質問し、小さな声で答えると、大仰に、へえそうなの面白そうねもつと話して、などと反応した。

やがて車は住宅街を離れ、郊外に出た。

「さあ、着いたよ」

レイコが車を止め、さっさと降りた。四人は車を出た。古い倉庫が建っているだけだった。

「こんなとこでパーティやるんですか？」

修が訝しそうに訊ねた。

「知らないの？ こういのが、こっちでは流行ってるの」

さっさと歩き出したレイコに四人は仕方なくついていった。

脇のドアを開けると、薄暗い明かりがついていて、なかはがらんとしていた。四人はきよろきよると倉庫を見回した。人影もなく、テーブルも用意されていない。とても、パーティをやる雰囲気ではない。

「あ……あの」

修が思い切ってレイコに声をかけた。

「パーティーじゃないんですか？」

「言ったでしょ。こういうのが流行りだって」

レイコは微笑した。その微笑に邪悪なものを感じ、修はぞくりとした。

そのとき、ドアが開いた。二人のアメリカ人少女が現れた。背の高い金髪と、アメリカ人には小柄なラテン系。ジュリーとリンダだった。

「まんまと引っ掛かったね」

ジュリーが四人の日本人を見て微笑んだ。リンダが倉庫のドアをロックした。

「Welcome to our ballbusting party, you yellow victims」

四人は惚けたように、突然現れた二人の美少女を見つめた。レイコは日本人たちに通訳した。

「ようこそ、玉潰しパーティーへって言ったの」

「え？」

四人は顔を見合せた。

「あの、それ、なんですか？」

孝志が怯えたように訊ねた。

「知らないの？ 玉潰し。金玉潰しのことよ」

「え……」

「金玉を潰して楽しむパーティーのこと。こっちにきて一カ月以上になるのだから、そのくらいの

英語、覚えなさいね」

四人は青い顔でお互いを見た。

「あ、あの……まさか……僕たちの」

レイコはその言葉を通訳した。二人のアメリカ人少女が笑い、頷いた。

「さっそく始めるね」

いきなりレイコが、傍らの孝志の股間を膝で蹴りあげた。孝志がうめき声をあげて膝をついた。

つづけて、その側にいた稔が犠牲になった。レイコの長い脚が伸び、爪先が正確に稔の睾丸に命中した。

事態をやっと悟った修と良雄は、悲鳴をあげて逃げだした。ジュリーが修に襲いかかり、背後から股間を蹴りあげた。修はうつ伏せに倒れた。

リンダは良雄の前に立ちふさがった。良雄は何かわめきながらリンダに突進した。リンダは、軽く避け、逆に良雄の右腕をつかんで背中にねじあげた。良雄の背後から股間に手をのぼし、ぎゅっと陰囊をつかんだ。

「これよ……これ」

リンダは興奮していた。泣きわめく良雄を罵りながら、思い切り指に力をこめてひねりあげた。

「ぐ」

良雄の全身が硬直した。リンダは興奮のあまり、二つの睾丸をひねり潰してしまったのだ。良

雄は血反吐を吐き、へなへなとくずおれた。

「しまった。潰しちゃった」

リンダは叫んだ。

「もう？」

ジュリーが肩を竦めた。

「まだまだこれからだってのに……ま、いいか。あと三人残ってるものね」

苦しい……助けて。

修の閉ざされた意識が徐々に開き始めた。

痺れていた神経が覚醒するにつれ、全身を覆う痛感が甦った。

体は石のように重く、身動きひとつできなかった。寒い。口のなかがひどく苦かった。喉にいがらっぽいものが貼りついていて。

………いつたい、なんでこんなことに。

今日の夕方だ。良雄、稔、孝志の三人と、加納麗子と名乗った女の四駆に乗り込んだ。連れてこられたのは郊外の古びた倉庫。逃げようとして背後から股間を蹴られた。後は凄まじいリンチだった。何度か股間を蹴られた。みぞおちや肋骨にも蹴りやパンチを浴びた。記憶はそこで途切れていた。悪夢を彷徨いながら、仲間の断末魔の絶叫を聞いたように思える。

「気分はどう？」

声が響いた。重い瞼をあげると、黒いパーティドレスの長身の日本人女性の姿がぼんやりと像を結んだ。

修は、仰向けに倒れていた。ぎしぎしと痛む体を無理に起こそうとした。なんとか顔だけをあげた。

倉庫の奥のソファでは、二人の白人少女が全裸で抱き合っていた。互いの体を吸い、指でまさぐりあっていた。

血の臭いがした。数メートル離れたところに、良雄、稔、孝志の体が転がっていた。白眼を剥き、股間を両手で押さえ、細かく痙攣していた。股間を中心に血溜まりが広がっている。

レイコは、修の視線の先を追い、それから修に視線を戻して微笑んだ。
「三人とも、睾丸を潰されて、半死半生よ。このまま放置したら出血多量で死ぬことになるでしょうね」

「あ……あいつら」

やっと呟れた声を絞り出した。

「え？」

「恵一や……健二を不能にしたのは……」

レイコはくつくつと喉の奥で笑った。

「そのようね」

「な、なぜ……」

「なぜ、玉を潰すのかって？ 面白いからなんじゃないの」

修の眼に涙が溢れた。面白いから？ 冗談じゃない。面白いから、彼らは不能にされ、発狂に追い込まれたというのか。人間は玩具じゃないんだ。そう叫びたかった。だが、声にはならなかった。修はただ涙を流した。嗚咽が漏れた。

レイコはしゃがみこみ、修のズボンをひきずりおろした。ブリーフをめくり、陰囊をちよんちよんつついた。激しい激痛が修の全身を貫いた。うめき声をあげ、激しく痙攣した。

「だいぶ腫れてるけど、まだ潰れてないみたいね」

レイコが言った。

「あそこに転がってる三人、ジュリーとリンダが睾丸を潰したの。残るはあんなだけ。私のために残しておいてくれたみたい」

「や……」

やめる、と叫んだつもりだったが、ぜいぜいと荒い喘ぎだけが漏れた。頼む。やめてくれ。お願いだ……。

レイコは、修の腫れ上がった顔が歪み、唇が必死に何かを伝えようと動いているのを楽しげに見つめた。口には歯が半分した残っていなかった。鼻はひしゃげ醜く曲がっていた。

「助けてほしいの？」

レイコはからかうように訊ねた。

「でもだあめ。あんたの睾丸を潰さないと、ここまでやってきた意味がなくなっちゃうもの。これも運命よ。受け入れなさい」

いやだ。死にたくない。命が助かっても発狂するのはいやだ。助けて。神様！

レイコは残忍な微笑を浮かべて立ち上がった。修の陰囊に踵を乗せた。腫れ上がった睾丸に体重をかけた。

四人の日本人留学生が発見されたのは翌朝だった。

「ええ、日本人の女の人に誘われてパーティに出掛けて、それっきり帰ってこなかったんです」

寄宿舎を訪れた警察官に、輝男は証言した。

「女性の名前は？ 顔は？」

「僕会ってないし、名前も聞いてません。すごい美人だとは修から聞いてましたけど……」

警察官が帰っていった後、輝男は仲間を襲った不幸よりも、それから逃れた運の良さに感謝した。キャンパスで女の子五人に蹴られた痛みはまだ残っている。今度こそ不能になってしまったかもしれないが、修たちに比べればまだましだ。

四人は瀕死の重傷を追っていた。精神に異常をきたし、とても証言はとれそうにない。恵一や

健二と同じだった。

帰国すべきなんだろうか……。輝男はしばし考えた。ポーンマス校に留学した日本人は十人。帰国した三人をのぞく七人のうち六人が拳銃を潰され、発狂した。残るは自分だけ。犯人はおそらく同一人物だろう。だとすれば、残った自分を狙ってくるのは当然だろう。

帰国しよう。輝男は決心した。

「これで誰もいなくなったってわけね」

リンダが言った。

「おめでとう。大成功よ」

だが、ジュリーは憂鬱そうだった。返事をしない彼女に、リンダはからかうように言った。

「もう一人の日本人のタマも潰したかったの？」

「そうじゃないけど……なんだか目標を達成しちゃうと、つまんない」

「大丈夫よ」

リンダはジュリーの腕を撫でながら慰めた。

「レイコから聞いたんだけど、隣の学校でも日本人留学生を二十人ほど受け入れてるそうよ。ちよつと遠いけど、遠征つてのでもいいんじゃない？」

ジュリーは気をとりなおした。

「私たちにタマを潰されにはるばるアメリカにやってきた連中は、まだまだいるってわけね」

帰国した輝男は、予備校に通うことにした。英語は何も身につかなかったが、両親は、歯を食いしばっても大学に行け、とうるさかった。

輝男は、予備校に行くふりをして、毎日違う駅で降り、喫茶店でぼんやり日を過ごした。

「アメリカというところは恐ろしい国だったなあ。無事帰ってこれただけでも感謝しないと」

輝男のペニスはなんとか回復した。だが、アメリカで集めた男性雑誌やピンナップの類はすべて捨てた。白人女性など見るのも嫌だった。

輝男は喫茶店に備付けのマンガ雑誌のグラビアをめくり、水着で微笑む日本人少女をしばしばと眺めながら呟いた。

「やっぱ日本人の女の子にかぎるよ。優しそうだし、バストだってひけをとらないコが増えたしなあ。どう考えたって、男のタマを蹴って喜ぶようなコはいそうもない。帰ってきてよかった」

時計を見ると午後四時だった。そろそろ帰ろう。輝男は伝票をもって立ち上がった。

支払いを終えて喫茶店を出た。駅まで歩いたが、どこをどう間違ったのか、人けのない裏道に迷い込んだ。初めて来る場所である。道を訊ねようにも通行人の姿もない。

ふと、かすかに人の声が聞こえた。きよろきよろすると、バブルで建設が途中で中止になったらしいビルがあった。声はそこから漏れていた。

何げなしにビルを覗いた。一階はエントランスにする予定だったらしい。ガラスの自動ドアの向こうにコンクリートが剥き出しになった広い空間があった。

自動ドアは半分開いていた。そこからなかに入ると、人の声はますます大きく響いてきた。どうやら上から聞こえてくるようだ。輝男は非常階段を見つけ、ひょいと覗いて、慌てて首を竦め、それからこわごわと再び覗き込んだ。

非常階段の途中で、二人の少女が、一人の少年を脅していた。二人ともいわゆるコギヤルではなかった。きちんと制服に身を包み、紺のソックスを穿いていた。髪の毛は染めていないし、厚化粧もしていない、普通の清楚な女の子たちだった。

一人が少年をはがい締めにし、もう一人が笑いながら少年を平手打ちにし、ズボンのポケットに手をつ込んだ。財布を抜き取り、「ちえつ、なんだこれだけかよ」と言い、それから、いきなり少年の股間を膝で蹴りあげた。少年は悲鳴をあげて脚を閉じた。「こら、脚広げな」と少女はまたも少年の頬を平手打ち。少年は涙を流しながら言いつけに従った。すると少女は今度は爪先で蹴った。少年の膝が崩れた。

今度ははがい締めにしていた少女が少年を引っ張って立たせ、二度たてつづけに股間を膝蹴りした。

「いこっか」「うん、いこいこ」

少女たちは、激しく痙攣してじつとうずくまる少年をほったらかしにして、階段を降りてきた。

輝男は慌てて物陰に身を隠した。

「いくら入ってた？」

「三千円」

「ゲーセン代にもならないじゃん」

「しょうがないよ。今度は金持ってそんな親父から巻き上げようぜ」

少女たちは去っていった。股間を蹴られた少年のうめき声だけを残り、ビルは静寂に包まれた。

どうやら、日本人の女の子だからといって、安心できそうにない。この世に女の子がいるかぎり、タマを蹴られる危険は常に付きまとうのかもしれない。

輝男は憂鬱な顔でビルを出た。(1999・11・16)